好酸球性副鼻腔炎疾患解説

【概要】
好酸球性副鼻腔炎は難治性の「副鼻腔炎」で、国の「指定難病」の一つです。

副鼻腔炎とは、鼻の周りにある空洞である「副鼻腔」の粘膜に炎症が起こる病気のことです。

好酸球性副鼻腔炎では、鼻や副鼻腔の粘膜に白血球の一種である「好酸球」が集まり、強い炎症を起こします。

その結果、嗅覚障害や鼻づまり、粘り気のある鼻水などを生じることがあります。

成人になってから発症することが多く、両側の鼻腔に複数の「鼻茸」と呼ばれるポリープができやすいのも特徴です。

治療にはステロイド薬を使った薬物療法が行われることが多く、必要に応じて内視鏡手術も検討されます。

近年では、ステロイド薬や手術で十分な効果が得られない場合に「生物学的製剤」と呼ばれる注射薬も使用されています。

【原因】
好酸球性副鼻腔炎は、白血球の一種である好酸球が鼻や副鼻腔の粘膜で過剰に働くことで発症します。

通常、風邪などのウイルス感染によって鼻や副鼻腔に炎症が起きると、主に白血球の一種である好中球が病原体への防御にあたります。

しかし、好酸球性副鼻腔炎では、何らかの要因で免疫反応のバランスが乱れ、本来は寄生虫などを攻撃する役割を持つ好酸球が過剰に反応してしまいます。

その結果、鼻や副鼻腔の粘膜に好酸球が通常より多く集まり、炎症を起こす物質を放出し、炎症を悪化させると考えられています。

現段階では、好酸球が過剰な反応を起こす直接的な原因は解明されていません。

ただし、気管支喘息やアスピリンなどの解熱鎮痛薬に対する過敏症がある人に多くみられることがわかっています。

また、風邪などのウイルス感染をきっかけに鼻の粘膜が過剰に反応し、それに続いて発症する可能性も指摘されています。

【症状】

好酸球性副鼻腔炎では、嗅覚障害や鼻づまり、粘り気の強い鼻水などの症状が見られます。

この疾患では、鼻や副鼻腔の粘膜に炎症が起こると、免疫反応の乱れから好酸球が過剰に働きます。
その結果、好酸球が出す物質によって炎症が長引き、粘膜が腫れ、ポリープ状に膨らんだ鼻茸が形成されます。

鼻茸は匂いを感じる嗅覚神経の近くにできやすく、嗅覚神経に匂いが届かなくなったり、炎症がおよんだりすることがあります。

そのため、匂いがわかりにくくなる嗅覚障害につながります。

嗅覚障害は比較的早い段階から現れ、症状が進むと匂いがほとんど感じられなくなるケースもあります。

また、鼻茸が大きくなると鼻の通り道が狭くなり、鼻づまりや口呼吸、口や喉の渇きなどを伴うこともあります。

さらに、粘膜の炎症によって分泌物が増えることで、粘り気の強い鼻水が鼻の奥に溜まりやすくなります。

この影響で、鼻水が喉の奥に流れ落ちる「後鼻漏」や咳を伴うこともあります。

なお、好酸球性副鼻腔炎ではこれらの症状が左右の鼻にみられることも特徴の一つです。

また、好酸球による炎症は耳の中でも起こることがあり「好酸球性中耳炎」という合併症につながる場合があります。

好酸球性中耳炎を発症すると、耳がつまったような感覚や難聴、粘り気のある耳だれなどが現れます。

【検査】

好酸球性副鼻腔炎が疑われる場合には、鼻腔内視鏡検査や血液検査などを行います。

鼻腔内視鏡検査では、細いカメラを鼻の奥に入れ、粘膜の炎症の程度や鼻茸の有無などを観察します。

血液検査では、白血球の中で好酸球が占める割合やアレルギー反応に関する項目を確認します。

このほか、鼻の奥や副鼻腔の状態をより詳しく調べるために、CT検査などの画像検査を行うこともあります。

画像検査では、病変の場所や広がりを確認し、好酸球性副鼻腔炎の可能性やほかの病気が隠れていないかを判断します。

特に、好酸球性副鼻腔炎では、目と目の間にある篩骨洞という副鼻腔に病変が強く現れやすいため、画像での確認が重要です。

さらに、必要に応じて鼻茸を採取し、顕微鏡で調べる組織検査を行います。
組織学的検査では、採取した鼻茸に好酸球がどの程度集まっているかを確認し、確定診断につなげます。

【治療】

好酸球性副鼻腔炎と診断された場合には、第一選択として薬物療法が行われます。

薬物療法では、主に炎症を抑える効果のあるステロイド薬を使用します。

使用するステロイド薬には、飲み薬である経口ステロイド薬と鼻に噴霧する経鼻ステロイド薬の二種類が用いられます。

経口ステロイド薬は、強い鼻づまりや嗅覚障害がある場合や鼻茸が大きく症状が重い場合に使用します。

ただし、ステロイド薬の長期間の使用は副作用につながる恐れがあるため、症状の経過を観察しながら徐々に投与量を減量していきます。

一方、症状が軽い場合や飲み薬などによって症状が落ち着いた後の維持療法には、経鼻ステロイド薬を使用します。

また、黄緑色の鼻水がみられる場合には、細菌感染も考えられるため、抗菌薬を使用することもあります。

薬物療法で十分な効果が得られない場合には、内視鏡手術を行い鼻茸を切除する方法も検討されます。

しかし、手術で鼻茸を切除しても、炎症の原因が抑えられていないため、再発することも少なくありません。

ステロイド薬や手術で十分な効果が得られない場合には、生物学的製剤と呼ばれる注射薬を使用する場合もあります。

生物学的製剤は、好酸球の過剰な働きを促す命令を抑える作用がある薬で、鼻茸を小さくし、鼻づまりや嗅覚障害を改善する効果が期待されています。

現在では、複数の種類の生物学的製剤を使用できるようになっており、症状や体質に合わせて使い分けられています。

【予防】

好酸球性副鼻腔炎を予防する方法は確立されていません。

しかし、好酸球性副鼻腔炎は感染症の罹患がきっかけになったり、気管支喘息の既往がある人、解熱鎮痛薬の過敏症がある人に好発したりすることがわかっています。

そのため、感染症対策を行うことで間接的に好酸球性副鼻腔炎の予防につながるケースもあるでしょう。
特に、気管支喘息や薬剤アレルギーの既往がある人は、外出時のマスク着用や帰宅後の手洗いうがいなどの感染対策を励行しましょう。

このほか、鼻づまりや匂いの変化など気になる症状がある場合には早めに医療機関を受診しましょう。